

平成二十五年 度

問題冊子

国	教
語	科
国	科
語	目
12	ページ数

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙を机上の右側に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

〔1〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

フィードバックもフィードフォワードも、システムの自律的な制御に関係した情報の流れのあり方を意味している言葉です。たとえばここに一人の受験生がいるとしましょう。全国的な模擬試験を受けて、その結果に思わしくないところがあれば、正解と較べて誤っているところを勉強して次に備えることが、受験に成功するためには必要です。これは自分の過去の成績を知って、現在の状態を修正する制御方式です。一般に設定された値と達成された値とを較べて、過不足分の値を知り、その値をゼロにするだけ現在の状態を変える制御がフィードバック制御です。クーラーの温度の設定などもこれに相当します。(差が出れば、その差を^⑦ゲンシヨウ^⑦ウさせる方向と拡大させる方向の二つの方式があり、それぞれネガティブおよびポジティブ・フィードバック方式と言います。)一般にシステムの状態は一度修正すれば終わりということにはなりません。環境の変動を反映してシステムの状態が絶えず変わっていく場合には、フィードバックを絶えずつづける必要があります。

再び受験生の例に戻って、その受験生が将来の目標校を選んで、全国の受験生の成績を参考にして、そこから目的を達成するためにあるべき自分の学力状態を^①スイテイし、そのあるべき状態にこれからの状態を合わせるように自己制御をするのが、フィードフォワード制御です。期待への制御と考えてよいでしょう。全体の状態がほぼ一定で、将来の状態が見通せる場合には、フィードフォワード制御もフィードバック制御も実質的には大きな差はありませんが、混沌とした状態にあるときに、将来の状態を知るためには、一種の予知能力が必要になります。それも将来の状態の一齣^{一瞬}を断片的に^①攔^①むだけでは不十分で、現在から将来の状態に至る変化の法則を^①攔^①まなければ、現在と将来の関係を^①知^①ることはできません。また将来を考えて、そこから現在のあるべき姿を知ることができません。そのためには混沌とした情報の中で大きな流れ(法則性)を^①攔^①み、それによって自分の状態を変えていくことが必要とされます。さらにその将来が、自己の積極的な活動によつて変わるときには、^①自己の活動のあり方を、時間的に位置づけていく必要があります。

このように自己の世界に環境から入ってくる混沌とした情報の中にさまざまな法則性を見出して、未来に創造的に対応してい

〔注〕 1 邊邑―滑は晋の辺境の地で、晋の領有の小国であった。 2 喪―喪中。 3 葬―葬儀。

4 墨衰経―黒染めにした喪服。 5 穀―晋はここに要塞をつくっていた。 6 秦女―秦の繆公の娘。

7 素服―喪服。敗戦のときは喪服を着る。 8 百里傒・蹇叔―秦の重臣。

問一 傍線部①「往無及矣」とは、どういうことか。簡潔に説明せよ。

問二 傍線部②「太子襄公怒曰」について、なぜ晋の襄公は激怒したのか。簡潔に説明せよ。

問三 傍線部③「孤」と傍線部④「孤」の違いを説明せよ。

問四 傍線部⑤「願令此三人歸、令我君得自快烹之」を、(1)書き下し文にし、(2)口語訳せよ。なお「烹」は「煮」の意である。

問五 秦の繆公は三將軍の敗戦をどのように考えているのか。簡潔に説明せよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合で、送りがなを省いたところがある。)

秦三將軍相謂曰、「將襲鄭。鄭今已覺之。往無及矣。」滅滑晉之邊邑也。當是時、晉文公喪尙未葬。太子襄公怒曰、「秦侮我孤、困喪破我滑。」遂墨衰絰、發兵、遮秦兵於殽、擊之、大破秦軍、無一人得脫者。虜秦三將以歸。文公夫人秦女也。爲秦三囚將請曰、「繆公之怨此三人、入於骨髓。願令此三人歸、令我君得自快烹之。」晉君許之、歸秦三將。三將至、繆公素服郊迎、嚮三人哭曰、「孤以不用百里奚、蹇叔、以辱三子。三子何罪乎。子其悉心雪恥。毋怠。」遂復三人官秩如故、愈益、厚之。

〔史記〕

くことは、自己の世界の中で新しいセマンティック(意味論的な)情報を生成していくということの意味しています。

余談になりますが、日本の社会は画一的なフィードバック社会であるために、その構成員は、時代の大きな流れを掴んで、その中で自分のあるべき態度を自律的に決定するというタイプの創造性が苦手であるばかりでなく、またその画一性から、個人がこういう行き方をとることを排除するように働く傾向があります。その代わり情報のフィードバックは非常に速く、またその情報に対する反応は(それが未知な原理の創造をフクむことではなければ)きわめてシユンビンに、組織的におこなわれます。もちろんフィードフォワード制御もなされますが、それはフィードバック的フィードフォワード制御と言ってよいほど、目先の将来からのフィードフォワードであり、実質的にフィードバック制御とあまり変わるところはありません。日本人の創造性は、マクロな状況への適応を主としたフィードバック面でハツキされてきたのです。フィードバック型社会では、行動目標ははじめから与えられているので、行動をするための「ハウ・ツー」が重要な問題となります。これに対して欧米型社会は、フィードフォワード型社会であると思われます。このような社会では、遠い将来における目標の設定が重要な課題であり、長期的レベルでの自己の行動規範の表明が必要とされるのです。フィードバックとフィードフォワードの内の双方の制御が共存して生命システムは生きているのですが、一般にシステムを取り巻く環境が分裂し、その状態が複雑で不確定になるほど、フィードフォワード制御が必要になります。

大繁殖をした鼠の大群が流れとなって行動し、海中に落ちて集団死するという話がありますが、人間も群集心理が強く働く状態では目先のフィードバック制御だけで行動するようになってしまふのです。この行動が常に成功するとは限りません。一定の枠の中で目標を追いかけた日本は、フィードバック制御(厳密にはフィードフォワード的フィードバック)を使って現在の状態になりましたが、ため込んだエネルギーを創造的なフィードフォワード制御のエネルギーに変えられないために、至るところで過剰適応をおこしてさまざまな摩擦が発生しているとも見ることができます。

戦後、日本の社会から見るべき哲学が創造されていないことは、上に書いたフィードバック型の社会と関係しているでしょう。フィードフォワード型の社会では、最も貴重なものが新しい意味論的な情報の創造です。そして自分の周りの人々の創造的

な発想を引用しあい、正確に伝えあうことが、まず社会全体がフィードフォワード型になるために必要ですが、これが悲しいほど現在の日本の社会ではおこなわれていません。哲学というものは、創造的なフィードフォワード制御のための法則性の発見という面を持っていないければ、単なる現象の整理の学に終わると思います。^③

ところで環境の中で人間や動物が味わう不確定さには、二種類のものがあります。第一は環境の物理的な状態の不確定さであり、第二は環境の意味的な状態が規定できないことによる不確定さです。これは環境は生きており、その生命的な面での状態を完全に知ることができないことによる不確定さです。国際環境や社会環境の未来がどうなるのかが不明という場合も、これに属します。また自己と環境との間の境界が不確定で規定できないことも情報的な不確定さです。これは人間がいま見えていると思っ

ている環境が、どこまで環境自体の性質によるものであり、どこまで自己によっているかを明確に規定できないということです。

たとえば国際社会の現状と未来について、さまざまな国の代表がその認識を述べるとすれば、その意見はすべて異なると想像されます。まして正しいとか正しくないとかという類の問題になると意見の一致は容易ではありません。このようなことがおきるのは、対象の認識が、それを見ている人のセマンティックな背景によるからです。^④しかし人々が見ているのは虚偽の世界かと言えば、そうとも言えません。各人のセマンティクスに立てば、それなりにリアリティが含まれており、その視点からは正しいとも言えるのです。このことは対象と自己の間の情報的な境界が曖昧であるという問題を意味します。ここからそもそも存在とは一体どういうものなのだろうかという疑問が湧いてくるのです。

(清水博「生命を捉えなおす」)

[3]

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

左

来る春は峰に霞をさきだてて谷の笈を伝ふなりけり

〔注1〕

右

わきて今日逢坂山の霞めるはたち遅れたる春や越ゆらむ

左はさきだつ霞に谷の道の春を知り、右は遅れたる春を関山せまやまの霞に見る。ことばは変れるに似て心はずで同じけれど、「峰に霞を」と置きて、「谷の笈を」といへる、よき歌にも多く詠める事には侍れど、この右の歌はいま少しどこほるところなくいひいだされて侍れば、まさるべくや。

〔宮河歌合〕

〔注〕1 笈かたひ―節をぬいた竹や、中をくりぬいた木で作った樋とび。

問一 傍線部①「谷の笈を伝ふ」とは、自然のどのような変化に注目した表現であるか。説明せよ。

問二 傍線部②「らむ」の働きについて、丁寧に説明せよ。

問三 傍線部③の「心」とは、何か。具体的に説明せよ。

問四 左右の歌のどちらがまさっているか。本文に則して、その理由を挙げて説明せよ。

問五 二首に共通する表現技法は何か。答えよ。

問一 傍線部ア、イ、ウのカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①「自己の活動のあり方を、時間的に位置づけていく」とあるが、何を、どうすることか。簡潔に説明せよ。

問三 傍線部②について、筆者は、日本と欧米の「創造性」の違いをどのように考えているか。具体的に説明せよ。

問四 傍線部③「創造的なフィードフォワード制御のための法則性の発見」とあるが、どういうことか。本文全体をふまえて説明せよ。

問五 傍線部④「対象の認識が、それを見ている人のセマンティックな背景による」とは、どういうことか。わかりやすく説明せよ。

〔2〕

次の文章は、横光利一「美しい家」の全文である。これを読んで、後の問いに答えよ。

ある日、私は妻と二人で郊外へ家を見付けに出て行つた。同じ見付けるからには、まだ一度も行つたことのない方面が良いといふ相談になつた。

私達はその日一日歩き廻つた。夕方には、自分達の歩いてゐる所は一体どこなのだらうと思ふほどもう三半器官が疲れてゐた。

草に蔽はれた丘の坂が交錯し合つて穩かな幕のやうに流れてゐた。人家はぼう／＼とした草のために見えなかつた。

「おい、ここはどこだらう。」と私は妻にいつた。

「私もこんな所知らないわ。」

「おれはもう、へとへとだ。」

「私もよ。私、もう歩くのがいやになつた。」

「ちや、ここで休まうか。陽が暮たつて、いぢぢやないか。」

「さうね、暮たつて別にかまはないわね。」

「休まう。」

私は草の中へ腰を降ろすと煙草を取り出した。妻も私の横へ座つて落ちついたらしく、暮て行く空の色を眺めてゐた。――

(ここで、私と妻とが同じやうに疲れたといふことが、私達一家の間に、^①大きな悲劇をもたらした原因であつた。――)

○

しかし、私はたゞ何も知らずに煙草を吹かせてぼんやりとしてゐただけである。このぼんやりとしたゆるんだ心理の續いてゐる

私は白い草の根をかみながら立ち上った。ふと、私はその草の根が、去年の秋、私達が座つて踏みつけたときの草の根に相違ないと考へた。それが一度葉を落してまた芽を出した。^③私達も廻るであらう。今に、不幸が亡くなるだらう。――
私は家へ歸つて来た。家の小路の両側は桃色の花で埋まつてゐた。この棚びく花の中に病人がゐるようとは、何と新鮮な美しさ^④ではないか。と私はつぶやいた。

(本文は原則として、河出書房新社版『横光利一全集 第二巻』に基づく。)

問一 傍線部ア、イの漢字の読みをひらがなで書け。

問二 傍線部①とあるが、「大きな悲劇」に至る原因と過程を本文に則してまとめよ。

問三 傍線部②は、小説中のどの部分に対応して記されているのか。本文から抜き出して答えよ。

問四 傍線部③とあるが、なぜ「私」はこのように思ったのか、推察せよ。

問五 傍線部④とあるが、なぜ「私」にとって「新鮮な美しさ」だったのか詳しく説明せよ。

る空虚な時間に、黙々として私達の運命を動かしてゐた何物かがあつた。それは一体何物であつたのか。私はふと、私のぼんやりしたその空虚な心のなから、急に、かうしてゐてもはじまらない、今日中に家を見つけないければ、と思ふあわただしい気持ち、泡のやうにぼつかりと浮き上つて来た。

「おい、もう一度家を探さう。疲れついた。今日中に捜してしまつて、それからゆつくり落ちつかうぢやないか。」

「ええ、さうませう。」と妻はいつた。

疲れてはいけない。疲れると判断力がなくなるものだ。私達は疲れた心でまた家を探しに出かけていつた。

ある草に包まれた丘の上に、私達は一軒の家を見つけ出した。

「あの家は貸家かな。戸が閉つてゐるね。あれは貸家だよ。」

私と妻とはいきなりその家の周囲をぐるぐる廻つた。

「ここはいいね。高いし、庭は広いし、花はあるし、朝起きても日にあたれるし。」

私の言葉の速度が疲れた妻の心を動かした。

「ええ、いいわね、ここにませうか。」

「ここにしよう、ここにいい。」

そこで二人は大家へ行つて部屋の様子をきき正した。私達はもう家そのものはどうでも良かった。たゞ自分達の疲れた身体に一時も早く得心^①を与えるために直ぐその家を借りようといふ氣になった。

○

その家へ越して来たのは、それから一週間もしてからだつた。私はその家が自分の家になつてから、初めて良く家の中を見廻した。すると、私は急に、「いやだ。」と思つた。どうしてこの明るい家の中に、こんな暗さがあるのだらうと考へた。北側に一

連の壁があるこれだ。——しかし、私は間もなく周囲の庭に咲き乱れてゐるとりどりの花の色に迷ひ出した。外の色が、内の暗さを征服した。私は北に連らなる頑固な壁を知らずしらすの間に頭の中から忘れ出した。

だが、秋が深くなると、薔薇が散つた。菊が枯れた。さうして、枯葉の積つた間から、漸く淋しげな山茶花がのぞき出すと、北に連らなつた一連の暗い壁が、俄然として勢力をもたげ出した。私はかぜを引き続けた。母が、「アツ」といつたまゝ死んでしまつた。すると、妻が母に代つて床についた。私の誇つてゐた門から登る花の小路は、氷を買ひに走る道となつた。

「どうも、この家は空気が悪い。古臭い空気がたまるのだ。家を変らう。家を。」
しかし、もうそのときには、妻の身体は絶対に動かすことが出来なかつた。さうして、再び夏が私達の家をめづつて来た。いちごは庭一面に新鮮な色を浮べ出した。桜桃が軒の垣根に連らなつた。ぶどうは棚の上に房々と実り出した。だが、妻は日日夜夜の中から私にいつた。

「私、この家を変りたい。ね、家をさがしてよ。私、もうこゝは嫌ひ。」

「よしよし、だが、もう少し待て、お前の身体が動けるやうにならなけりや。」

「いやよ。私、もうこれ以上ここにゐれば、死んでしまふにきまつてゐるわ。」

「しかし、動いたなら、なほ死ぬにきまつてゐるんだ。だから、」

「いやいや、私、他で死ぬのならかまはないわ。ここで死ぬのはいや。」

その中に大きな百合が家の周囲で馥郁とにほひ出した。

「そら、今日は百合が咲いた。」

「うらうら。」

二人が百合の花の大きさに驚いてゐる中に、また、ばらの大輪が咲き初めた。

「おい、今日はばらだ。これは美事だ。」

「まあまあ、クリーム色ね、白いのはまだかしら。」

私は百合の花を手折つて来て妻の枕元に差しやつた。すると、妻は激しいにほひのためにせき続けた。

「これやいけない、百合はお前を殺すんだ。薔薇がいゝ、薔薇が。」

百合と薔薇とを取りかへて部屋の暗さを忘れてゐると、次ぎにはおいらん草が白と桃色の雲のやうに、庭の全面に咲き乱れた。

○

妻の青ざめた顔色は漸く花のためにやはらぎ出した。しかし、やがて、秋風が立ち出した。花花は葉を落す前に、その花を散らすであらう。

ある日、私は、私達をこの家へ導き入れた丘の上へ行つてみた。私は二人で休んだ草の中へ座つてみた。そこで私は、かつて前に、疲れた心をぼんやりとさせたやうに、今また不幸に疲れた心をぼんやりと休めてみた。私は私の心の中から、何か得がたい感想が浮び出しはしないかと待ちながら。だが、私の胸の中からは、何物もわき上つては来なかつた。私は私の心に詮つてゐるものをふるひ落とすやうに、私の心をたゞいてみた。

「生活とは何か。」

「苦しむことだ。——」

「苦しみとは何か。」

「喜ぶためだ。——」

「喜びとは何か。」

「生活することだ。——」

「それなら、生活とは。」

国語問題訂正

訂 正

国語

問題冊子 11ページ

(4) 問題文の3行目

(誤) 困喪破我滑

(正) 困喪破我滑

